

はじめに

平成二十七年の二月、武蔵野書院主の前田智彦氏の深いご理解のもとに、私は古筆切に関する、小さな一冊の本を出版することを得た。その名も『古筆の楽しみ』。それは、ここ三十数年の間に、自ら集め得た古筆切の中から、八十一点を選び出し、それを図版として収め、その見どころ、勘どころなどを平易に解説したもので、私なりの長年の経験から、多少の成算はあったものの、それでも今日の出版不況に鑑みて、はたして読者の反応はいかがなものかと、内心心配はしていた。だが、いざ出版されてみると、初版は順調にさばけて、まる一年を経過したところで、増刷の知らせを出版社からいただくことになった。まことにありがたい話である。

そこで、前田氏とも相談の結果、前著とまったく同じ方針のもと、ここに『古筆の楽しみ』の続編を出版することになった。収めるところの古筆切の数は、八十二点。ただし、前著では、冒頭に収めた「古筆切の基礎知識」という一文は、今回省略することにした。そこには、「古筆切の発生」「古筆切の鑑賞・保存法」「古筆切の鑑定」「古筆切の案内書」「古筆切の名称」「古筆の楽しみ」などの各項目につき、これまた肩の凝らない平易な文章で解説を施してある。ぜひとも参照されたい。

なお、本書の巻末には、前著も含めて、筆者・切名・書目の各索引を付しておいたので、ご利用いただければ、幸いです。

本書所収の古筆切の解説にあたっては、今回も、石澤一志・恵阪友紀子・岸本理恵・久保木秀夫・須藤圭・立石大樹・寺田伝・中葉芳子・日比野浩信・舟見一哉・松本大の諸氏の助力を忝くした。ここに記して深謝申し上げます。

最後に、私の手もとにある古筆切のストックと、私の年齢などを考慮すると、私自身この種の本を出版することは、

30	二条為藤	肥前切	(新古今集)	68
31	慶運	四半切	(新古今集)	70
32	寂蓮	六半切	(新勅撰集)	72
33	小倉実名	四半切	(新勅撰集)	74
34	二条為定	六半切	(続後撰集)	76
35	九条教家	四半切	(続古今集)	78
36	四条隆博	八瀬切	(続古今集)	80
37	津守国冬	伊勢切	(続拾遺集)	82
38	小倉実名	四半切	(玉葉集)	84
39	慈寛	四半切	(玉葉集)	86
40	甘露寺隆長	周防切	(続千載集)	88
41	二条為親	卷物切	(続後拾遺集)	90
42	兼空	四半切	(風雅集)	92
43	二条為右	四半切	(新千載集)	94
44	飛鳥井雅親	卷物切	(新続古今集)	96
45	堯孝	仏光寺切	(新続古今集)	98

私撰集と古筆切

46	藤原為家	四半切	(古今六帖)	102
47	仲頭	四半切	(拾遺抄)	104
48	藤原定頼	山城切	(和漢朗詠集)	106
49	後京極良経	卷物切	(和漢朗詠集)	108
50	九条教家	卷物切	(和漢朗詠集)	110
51	世尊寺行尹	卷物切	(和漢朗詠集)	112
52	藤原基俊	山名切	(新撰朗詠集)	114
53	源頼政	六半切	(堀河百首)	116
54	覚源	四半切	(雲葉集)	118
55	後醍醐天皇	四半切	(新浜木綿集)	120
56	小倉実名	四半切	(藤葉集)	122
57	花山院師賢	佐々木切	(二八要抄)	124

私家集と古筆切

58	飛鳥井雅世	大四半切	(散木奇歌集)	128
59	葉室光俊	芝山切	(顯輔集)	130
60	堯孝	四半切	(俊成家集)	132
61	一条冬良	四半切	(拾玉集)	134

62	兼好	四半切	(文集百首)	136
63	藤原定家	五首切	(家良集)	138
64	後伏見天皇	広沢切	(伏見院御集)	140
65	頼阿	四半切	(頼阿法師詠)	142
66	慈円	四半切	(六百番歌合)	144
67	慶運	卷物切	(千五百番歌合)	146

物語と古筆切

68	藤原為家	六半切	(伊勢物語)	150
69	京極為兼	四半切	(伊勢物語注)	152
70	東常縁	大四半切	(伊勢物語注)	154
71	坊門局	六半切	(源氏物語)	156
72	冷泉為相	六半切	(源氏物語)	158
73	後光厳天皇	六半切	(源氏物語)	160
74	今川了俊	伊予切	(源氏物語)	162
75	花山院師賢	松尾切	(源氏集)	164
76	顯昭	建仁寺切	(源氏釈)	166
77	源通親	六半切	(狭衣物語)	168

正・続索引(筆者・切名・書目)

78	讃岐	六半切	(狭衣物語)	170
79	蛭川親当	四半切	(狭衣物語)	172
80	後伏見天皇	桂切	(風葉集)	174
81	二条為氏	四半切	(大鏡)	176
82	慶運	卷物切	(未詳絵詞)	178

46 藤原為家 四半切 (古今六帖)

古今六帖は、万葉集から後撰集頃までの約四千五百首を二十五項目約五百題に分類した類題歌集。源氏物語や枕草子にもその影響が考えられる重要な作品でありながら、二次的な撰集ということもあつてか、これといった有力な伝本には恵まれていない。現存伝本は全て同系統で、ほとんどが江戸時代の書写本という状況である。

ところが、古筆切としては伝藤原行成筆切、伝坊門局筆切、伝慈円筆切、伝九条教家筆切など、平安・鎌倉期の書写断簡が少なからず残されている。

掲出は、鎌倉中期頃書写の、古今六帖の目録部分の断簡で、筆者を藤原為家と極めている。ただし、『私撰集残簡集成』『平成新修古筆資料集 第四集』では、ツレと思しき断簡が、『昭和古筆名葉集』に「古今和歌六帖七寸五分」と記載される伝慈円筆白砂切として収められている。一面十行の、もとは四半形の冊子本。掲出切は料紙の上下が裁断されており、縦一八・八センチ、横一

五・一センチ。他にも『古筆学大成』や『古筆への誘い』にもツレがみられるが、筆者が阿仏尼、民部卿などと極められているものもあり、その点、注意が必要である。

現存伝本に比べて格段に古い書写本の断簡であり、本文には異同も少なからず認められ、古今六帖の本文研究上、極めて重要な存在となっている。
(日比野)

かめ	いを	こゑ
ふな	すゝき	たひ
あゆ	ひを	かは
かはつ	はし	ひ
ゐせき	しからみ	よかは
あしろ	やな	え
いけ	ぬま	うき
たき	にはたつみ	うたかた
さは	ふち	せ
うみ	あま	たくなは



SAMPLE

SAMPLE

SAMPLE

SAMPLE

SAMPLE

SAMPLE

SAMPLE